

# 特別支援学校における情報モラル指導用教材の開発とその実践的検証

中筋 千晶（和歌山大学教育学部附属特別支援学校）

概要：情報モラル指導用教材は文科省はじめ各社企業や教育センター等で開発・提供されているが、特別支援学校用に特化したものは稀である。しかしながら支援学校の生徒らのスマホ所有率も高くなっており、様々なトラブルや依存症も問題となっている。そこで、本校生徒のネット利用実態を踏まえ、情報モラル指導用教材を開発しその効果を検証した。その結果、支援を要する生徒向けの教材には、当然のことであるが、適切な視覚支援といった工夫が必要であり、授業実践においては理解度に合わせて考える時間を十分に確保し、与える情報量や活動の容量に無理がないように設定するといった配慮等が必要であることがわかった。

キーワード：情報活用能力，特別支援，情報モラル指導用教材

## 1 はじめに

特別支援学校でもネット上のトラブルが多発しており、情報モラル教育の実施が急務といえる。しかしながら、特別支援学校向けの情報モラル指導用教材はそう多くない。信頼できる教材としてNTTドコモが提供しているスマホ・ケータイ安全教室の特別支援学校編教材<sup>\*1</sup>が挙げられるが、これは情報セキュリティを含むあらゆる分野を網羅していて非常に優れていると言える。しかしながら、支援を要する児童生徒のニーズは多様であり、スマホやSNSの利用実態の差も個々に大きく違う。

金森(2012)<sup>\*2</sup>は、「障害のある子どもたちはそれぞれの障害の特性に応じて情報を得ること、発信すること、処理することに困難」があり、知的障害、発達障害を持つ生徒は「様々な情報を処理することの困難性」を持つと述べている。

本校の生徒のように、軽度知的障害と自閉症を併せ持っている場合、スマホやパソコンなどのツールは使えるが、それらから得られる情報の処理に困難性を持っていると言える。彼らは情報を正しく理解すること、情報の真偽を見極めることが難しく、「心の理論」<sup>\*3</sup>が未獲得のため、相手を理解できない、直感的理解に欠ける、融通が利かないという性質を持つと言われている。これらのことから、トラブルに巻き込まれた時の対応などに定型発達をしている子供たちに比べ、より困難を持つと考えられる。

ひとつひとつの問題を丁寧に授業で取り上げ、自分のこととして落とし込んでいくことが必要である。そのためにも、何度も繰り返し取り組まなければならない。

以上のことから、現在勤務する特別支援学校（以

下、本校）の生徒を対象にした場合、その利用実態や今後のリスクを想定した情報モラル指導用教材やカリキュラム開発の必要性を感じた。

注) \*1 NTT Docomo スマホ・ケータイ安全教室 特別支援学校編教材ダウンロード

[https://www.nttdocomo.co.jp/corporate/csr/safety/educational/manual\\_download/tokushi.html](https://www.nttdocomo.co.jp/corporate/csr/safety/educational/manual_download/tokushi.html) (参照日 2017.08.11)

\*2 江田裕介編著(2012) 特別支援教育における情報モラルとコミュニケーションの指導 (第1章-1 「特別支援教育における情報教育と情報モラル教育の課題」より)

<http://www.wakayama-u.ac.jp/~eda/ReferenceFiles/InformationMoral/InfomoralEducation.html> (参照日 2017.08.11)

\*3 別府哲、小島道生(2016) 「自尊心」を大切にしたい高機能自閉症の理解と支援。有斐閣選書

## 2 研究の方法

### (1) 調査対象および調査時期

- ・ 平成28年度 特別支援学校高等部1年生4名、2年生4名、3年生1名 合計9名
- ・ 平成29年度 特別支援学校高等部1年生3名、2年生4名、3年生4名 計11名

### (2) 研究の目的

特別支援学校でも情報モラルを指導することが強く求められている。教材は世の中にあふれているが、特別支援学校に特化したものは少ない。存在したとしても、本校の生徒を対象にした場合、課題が残る。理解や般化が難しい生徒に、視覚支援で理解を助け、ひとつひとつの問題を丁寧に扱い、自己理解を促し、周囲の信頼できる人物に相談できるようになるということを目指し教材を開発、授業実践を行い、その結果を検証する。

### (3) 情報モラル授業実践 (全6回)

- ① 「ネット依存あるある」
- ② 「たった一言のちがいで…」 (NHK for School)
- ③ 「送った写真のゆくえは…」 (NHK for School)



スマホの画面を提示し、同時に簡潔な文の箇条書きで説明を提示した。

本時はNHK for School の動画を使用した。非常にわかりやすいが、記憶に残すことや人間関係の把握に困難があるため、ホワイトボードを用いて動画視聴前に登場人物の説明や、視聴後に話の流れを掲示した。難しいと思われる語句を全員で確認し、考えるための材料をそろえておいた上で、ペアで問題点について考えて発表する活動を行った。また、ネットに関係なく、いじめは道徳的にいけないことだという確認もした。

本時のポイントは簡潔にし、あらかじめワークシートに印刷しておき、読み上げながらの確認とした。

自己理解を図るため、振り返りは、ARCS モデルに照らした4問とした。(図2-6)

1. は ATTENTION(注意), 2. は RELEVANCE(関連性), 3. は CONFIDENCE(自信), 4. は SATISFACTION(満足感)と捉えている。設問が多くなると生徒の負担となるため、この4問のみとした。

■今日の授業の教材評価 (動画)	とても そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	まったく 思わない
1. 見てみようと思える内容だったと思う				
2. 動画の中に自分に関係することがあったと思う				
3. 動画の内容を正しく理解できたと思う				
4. 動画の内容を勉強してよかったと思う				

図2-6

○ 今回の授業で見つかった課題点

前回よりも活発な授業となったが、ペアでの活動回数が多すぎたため、時間が不足し、考えが深まらない授業となった。今後は生徒の理解力を考慮して、発問はなるべくシンプルにし、活動は主なもの1つに絞るべきという方針が見えた。

### 3.3 実践事例③

- 日時 H28年11月30日(水) 第2限(9:30~10:20)
- 対象 高等部普通科8名(男子5名, 女子3名)
- 題材名「送った写真のゆくえは…」(NHK for School)
- 本時の目標

- SNSなどで起こっているトラブルを知る。
- インターネット上での個人情報の扱い方について考える。

○ 改善したい生徒の実態と授業設定の理由

LINE, Twitter の利用が目立ち、脅しや悪口を書いたツイートめぐり保護者を巻き込んでのトラブルがあった。当事者には起こった問題の理由となぜしてはいけないのかを考えさせ、その他の生徒については未然に防ぐ方法を知らせるため。

○ 前回の授業から改善した点

話し合いの内容を深めるため、ペアで話し合う設問を1つに絞った。

○ 今回の授業で見つかった課題点

話し合いの場面において、トラブルが起こった理由を考えるように指示したが、「?マークを入れたほ

うが良かったのではないか?」や「もっとわかりやすい返事をすればよくなる」など気づいたことやアドバイスを書いていた。良い意見であるが途中で質問の意図とずれていることに気付きためらっている生徒がいた。その場合はペンの色を変えて書くように指示を加えた。表現の方法に限りがある生徒には答えに幅を持たせる必要を感じた。

### 3.4 実践事例④

- H29年2月27日(月)第2限(9:50-10:30)
- 対象 高等部普通科8名(男5名, 女3名)
- 題材 「友だちの友だちは友だち?&セクストーション」\*1
- 本時の目標

- ネット上で起こる問題の仕組みを知る。
- ネット上で起こった事件について知り、自分のネットの使い方について考える。

○ 改善したい生徒の実態と授業設定の理由

LINE で異性の友だちが増えており、中でもネットのみの友だちが目立つ生徒がいた。また、不適切なサイトの視聴をしていることが、学校のパソコンの履歴から発覚した。よって、情報の拡散がどのようにして起こるのかを知り、慎重になることの重要性を知らせる。また、異性への過度な興味から判断を誤る例を知らせるため。

○ 前回の授業から改善した点

問題になると思われるシーンを選んで自由に話し合う形にして、話し合いの幅を広げた。それぞれのペアの良い意見を取り上げて、評価した。

○ 今回の授業で見つかった課題点

LINE の設定などについての注意事項をまとめた漫画を作成したが、時間内に扱えず配布のみになった。家庭での使い方などに配慮するべきだった。

### 3.5 実践事例⑤

- 日時 H29年5月15日(月)第2限(9:50-10:30)
- 対象 高等部普通科9名(男7名, 女2名)
- 題材 「友だちになっていっしょ?連絡先聞いてもいっしょ?」\*1
- 本時の目標

- LINE で新しい友達を作るときに起こる問題について考える。
- その問題の対処法を知る。

○ 改善したい生徒の実態と授業設定の理由

校内でのLINE のつながりが増え、連絡先交換や返信の強要などの被害の訴えがあったため、当事者にはその理由を考えさせ、それ以外の生徒には未然にトラブルを防ぐ方法を知らせるため。

### 3.6 実践事例⑥

- 日時 H29年6月28日(水)第2限(9:50-10:30)
- 対象 高等部普通科11名(男8名, 女3名)
- 題材 「ツイッターでデマ拡散」\*1
- 本時の目標

- ネット上で起こる問題の仕組みを知る。
- ネット上で起こった事件について知り、自分のネットの使い方について考える。

○ 改善したい生徒の実態と授業設定の理由

実生活でも善悪の判断が難しい生徒が多い。いたずらの限度などにも理解が及ばず、けんかにも発展することもあった。また、言葉を鵜呑みにすることが

多いので、一呼吸おいてよく考えることでトラブルを未然に防ぐ方法を知らせるため。

注) \*4 提示教材の開発には「こみ Po!」(マンガ作成ソフト。Web technology 社)を利用。

\*5 和歌山大学教育学部豊田研究室(2015)明日から即実践できる!!情報モラル指導用教材  
http://www.wakayama-u.ac.jp/~toyoda/mr1/(参照日 2017.08.11)

#### 4 結果

授業を重ねるうえで出てきた課題点をその都度改善して授業スタイルを確立してきた。その結果として、ARCSモデルに照らした自己評価を表4-1に示す。B~I

は平成28・29年度共通して在籍していた生徒である。

(1)興味の持てる内容だった(2)自分に関係のある内容だった(3)内容を正しく理解できたと思う(4)今日の学習をして良かったと思う、の4点である。

(1)(3)(4)については、5回の授業(1回目は実施していない)を通して、ほとんどの生徒が「そう思う」「まあそう思う」と回答した。しかし、(2)については前半「あまりそう思わない」「まったく思わない」と答えた生徒が多かったが、6回目には11人中9人が「自分に関係ある内容」と答えた。

各授業後の結果から言えることは、回を重ねることで、自分に関係がある内容だと感じられている生徒が増えているということである。表4-1中の生徒Eは前半3回まで「まったく(あまり)関係ない」と答えていたが、5回目で「まあ関係がある」6回目で「とても関係がある」と答えている。

情報モラル教育において、生徒自身に実感が得られる内容でなければ今後の自分の生活を変えよう、生活に生かそうという発想にはつながらないことは、当実践を通じて指導者側としても捉えられた。その点で、授業後の生徒アンケートにおいて、自分に関係があると捉えることが重要であるとの認識を得られていることは望ましい結果であるといえる。

#### 5 まとめ

生徒の実態把握や実際に生じたスマホ利用におけるトラブルから、情報モラル指導の内容を決め、そのニーズに応じた教材を開発し、6回に渡る授業を実践した。その都度、各回の授業を振り返り、実践上の課題を挙げて、生徒らが理解・実感できる内容や自分事であると捉えやすい指導方法・授業展開等に近づけていくことができたといえる。

教材開発上の工夫としては、授業中の理解を促し、

また、何度も見直して自分たちで理解ができるようにイラストと短い会話文を吹き出しに入れるという漫画教材で視覚支援を行った。

授業実践上の配慮としては、与える情報量と解決すべき課題の数を適切に設定し、生徒の答えに幅を持たせた。そうすることで多様な意見が出るようになった。また、黙り込んで話さない、何も書かないという時間がなくなり、サブティチャーが話し合いを促さなくても話し合いが進むようになった。

#### 6 今後の課題

表4-1中の生徒Fは、ほぼ一貫して自分に関係ないと答えているが、一度だけ「とても関係がある」と答えている。それは同じ体験をたまたましていたからである。実際に経験したことではなければ自分に関係があると思えないところに、般化に課題があることがうかがえる。記述感想では模範的な内容を書きながら、「自分に関係することなどは全く思わない」と答えているのである。これは場面般化、対人般化に困難性を持つ一因と言える。将来的に、自分一人で解決する力を求めるのではなく、問題に直面していることにいち早く気づき、誰にどのように相談するのかということを経験的に身に付けておくことが重要であると考え。特に自閉症を持っている生徒には指導場面以外では般化しにくいという課題がある。複雑な文章や状況などを理解するのが難しく、また、学んだことの般化が難しいとなれば、授業で知識や体験を積むと共に、問題に対峙したときに誰に相談してどのように解決するのかという道筋、パターンを刷り込んでおく必要があり、家庭との連携も必要不可欠である。

今回行った各授業においては、生徒に対して、身の回りの大人に相談することを強調してきたが、ワークシートなどに形にして残すことや同時に保護者への啓発も必要だと思われる。

#### 参考文献

- ・ 西園昌久(2009)SSTの技法と理論。金剛出版
- ・ J.M.ケラー(2010)学習意欲をデザインする ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン。北大路書房
- ・ 湯澤美紀・川村暁・湯澤正通(2013)ワーキングメモリと特別な支援 一人ひとりの学習のニーズに応える。北大路書房
- ・ 安藤隆男(2016)特別支援教育の指導法。教育出版
- ・ 腰川一恵(2017)発達障害の子をサポートする学習・生活支援事例集小学校。池田書店
- ・ 宮口幸治(2017)教室の困っている発達障害を持つ子どもの理解と認知的アプローチ。明石書店

**表 4-1**

生徒	2 自分に関係のある内容					
	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	
A	2	1				
B	3	4	4	4	4	
C	4	4	4	4	4	
D			4	4	3	
E	1	2	1	3	4	
F	2	1	4		1	
G		3	4	3	3	
H	2	2	3	3	3	
I	4	3	4	3	4	
J				3	2	
K					3	
L				4	3	

4...とてもそう思う 3...まあそう思う  
2...あまり思わない 1...まったく思わない